

タイトル:平成 23(2011)年度 研究セミナー

日程:平成 23 年 12 月 19 日(月)～21 日(水)

場所:東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 3 階 マルチメディアセミナー室(306)

「ペルシア語文化圏における歴史の伝達 - 『選史』の流行と受容を中心に」

大塚 修 (東京大学大学院)

時が経つのは早いもので、第 1 回中東・イスラーム教育セミナー(2005 年 7 月 26 日-29 日)に参加し修士論文の内容の一部を報告させて頂いてからもう六年半になる。その時に様々な専門分野の先生方・同僚達と意見を交換できたことは博士課程で研究を進めていく上で今でもかけがえのない財産となっている。そして博士論文を執筆する段になり今度はこの研究セミナーで報告させて頂き、貴重なコメントを頂けたことは本当に有難かった。このような場を七年間に亘り提供し続けてくださっている先生方・事務局の方の熱意と労力にまずは謝意を表したい。

教育セミナーの受講者の参加動機は様々だが、研究セミナーの受講者には「博士論文執筆」という共通の目標がある。自分が報告する以外にも、そういった同じ目標を持つ仲間の報告を聞き議論する中で自分の博論を見つめ直し再構成するよい機会となった。また、昼の部だけではなく夜の部でも先生方や仲間達と色々情報交換ができたことは大きい。博論を書くのはもちろん個人の仕事だが、その過程で先輩方や同僚達がどのように博論を書き上げたのか、また書いているのかというのは気になる点である。普段の研究会ではあまり接することのない様々な専門・地域の仲間のスタンスを知ることができた。その中でも、博論執筆後のことまでを射程にとらえた福島康博氏による報告「私の博士論文:たどった道およびたどらなかった道」には大きな刺激を受けた。博論にかけられる時間が短くなってきている今、どのように博論をまとめ上げればいいのかのヒントを頂いた気がする。またこれは言うまでもないが、報告時間と質疑の時間が一時間ずつと十二分に設けられているのも有難い。学会・研究会など個人の研究を披露する場は多々あるが、これほど長く一つの報告に対して時間を割いてくれる場は他にはないだろう。ほぼ「無制限」に議論する中で普段は見えない論点が見えてきたこともあった。このセミナーで得た新鮮な刺激を胸に今後の研究者を進めていきたい。

本セミナーでただ一つ残念な点は毎回追加募集が出される点である。参加する受講生が定員に近ければ近いほど、多様な人から多様な意見が出され議論も盛り上がるはずである。今後も本セミナーが若手研究者にとって貴重な場を提供し続け、多くの研究者に利用されるようになることを願ってやまない。